講座　　「最も大切なもの――畏敬の念」　　　　　　　　　　　　　２０２１年５月２３日（日）

霜山徳爾『素足の心理療法』（みすず書房）

九章　畏敬性

　心理療法にとって、第九に必要なのは畏敬性ということである。これは忘れられた概念でもあるので再認識を必要とする。ゲーテの「ウィヘルム・マイスターの遍歴時代」に次のような一節がでてくる。

　「生まれのよい健康なこどもは多くのものを具えています。自然はすべての人に一生涯の間、必要とするものを全部与えました。これを発展させるのがわれわれの義務です。往々にしてそれはひとりで一層よく発展します。しかし、**ただ一つ誰も持って生れてこないもの**があります。しかもそれこそ**人間があらゆる方面にかけて人間であるためには、最も大切なもの**です。それを見つけることができたら言ってごらんなさい。」…

　ウィルヘルムはしばらく考えてから頭をふった。彼らは適当な間（ま）をおいてから叫んだ。『**畏敬です**』　ウィルヘルムは呆気にとられた。**『畏敬です』と繰返し言われた**。「**これはすべての人に欠けています。多分あたなご自身にも**」。

　凡百の精神医学者や臨床心理学者よりも、はるかに深い人間性への洞察を持っていたゲーテが、これだけ明瞭にかつ強く指摘したことに対して、心理療法は当然、無関心ではいられない。おそらく「畏敬」というのはM.ブーバーのいう「根源語」の一つなのであろう。…

　畏敬は人間の厳然たる限界を確信するところに基づく。この限界に到達して、残照の地平から別なものが視野にあらわれる時、畏敬の念が生じてくる。…

　心理臨床をやっている人なら誰でも知っているように患者のどうしようもない、いわば宿業の姿がもっとも露わにされ、その姿のむごさに息を呑む場面を凝視せざるを得ないような時に、治療者のすぐれた対応を生み出すものは忍辱（にんにく）と畏敬の念しかないのであり、治療者も患者もそれによって育つのである。

◎河合隼雄先生

「相談室から」『新しい教育と文化の探求』（創元社）

　心理療法ということを職業としているので、私のところへは、いろいろな方が相談に来られる。親子、夫婦関係などの問題、あるいはノイローゼの苦しみに悩む人が、自分の状態を訴え、そして、どのようにすればよいかを尋ねられる。一刻も早く治してほしいというのがその真情であろう。

　ところが、困ったことに私はどのようにすればよいか解らないのである。もっと開きなおって言えば、私は「治す」ことなど出来ないのである。体の病いと違って、心の病いは他人が治せない。病んでいる本人が自ら事態を明らかにし、自ら治るための努力を重ねるより治る道はないのである。私に出来ることは、自ら「治る」人を手助けするくらいであって、「治す」ことではない。…

　心理療法家としては、その人の苦しみを知りつつも何ら具体的な援助の方法をもたないのだから、これも苦しい話である。それで、ただ黙って見ているのも辛いことなので「頑張って下さい」と言うことになる。気がついてみると、私はいつしか「頑張って下さい」というのが口癖になってしまっていた。…

　（悩みをもった人が相談してくる）自分の心の中の苦しみ、それに加わってくる周囲からの圧力…。それを聞いても、実のところ私はどうしようもないのである。ただ、私が他の人と違うのは、その人が怠けているのでも、勝手をしているのでもなく、一生懸命努力していることをよく知っていることである。しかし、いくら努力をしても、人間仕方がないときは仕方がないのである。そして、われわれ人間にとってできることは、いくら苦しくとも、ただ頑張ることなのだ。私は電話を聞きつつ、いろいろな思いを抱くのであるが、結局、最後には「では、頑張って下さいよ」ということで、電話を切ることになる。

　自分で、この口癖に気づいてしまうと、われながら無能な話だなと感じるようになった。いつも「頑張って下さい」ではなくて、何かいい方法がないかと考えてみるが、まったく無為無策なのである。いろいろ考えながらも、結局は、「苦しいことはよく解ります。頑張って下さい」とくり返しているのだから。しかし開きなおってみると、この無為こそが私の本職のような気さえしてくるのである。

　私は時に、自分の仕事の理想は「何もしないことに全力をあげる」ことではないかとさえ思う。人びとは自分の力で治ってゆく。自分の力で治ってゆく人の自己治癒の力を最大限に発揮させる最良の方策は、他から余計な力を介入させないことだ。こんな観点からみると、心理療法家としての失敗は、何かしなかったためよりも、何かしたために生じることの方が多いように思われる。

　余計なことをしたために強い依頼心をおこさせたり、その人の自ら立ち上がる力を阻害してしまったりすることが多い。それに、一体何をするおとが、その人の役に立つかなどということは、本当のところめったに解らないのである。そのときによいと思ってしたことが後で悪い結果につながることも多い。一個の人間の成長に役立つ最良の方法など私に解るはずがないという確信と、この人は自分でそれを必ず見出すだろうという確信とに支えられ、われわれは苦しむ人を前にして無為に居る強さをもつことができる。

◎ゲーテ

（「ヴィルヘルム・マイステルの遍歴時代」登張正實訳『ゲーテ全集８』潮出版社）

　・「畏敬」は第２巻１章。　・「フィディアス」は３巻18章。

「生れのいい、健やかな子供たちは」と彼らはこたえた。

「多くのものを身に備えています。自然はひとりひとりに一生涯必要なものをすべて授けているわけでして、それを発展させるのがわれわれの務めですが、時には、われわれの手を借りずに、それがひとりでにもっとよく発展していくことがあります。しかし、**誰もこの世に持って生れてこないものがひとつだけある**のです。しかも、それは、**人間がどんな方面に向かっても一個の人間であろうとするためには、なによりも大事なもの**です。それがなんであるか、あなたがご自分で見いだせるなら、おっしゃってください」　ヴィルヘルムはしばしあれこれと思いめぐらしたが、ついに頭を振った。

　彼らは、かなり口にするのをためらう気配を見せたのち、叫んだ。「**畏敬です**」　ヴィルヘルムははっと胸をつかれた。「畏敬です」ともう一度ことばが発せられた。「**これは、どんな人にも欠けています**。ひょっとしたらあなたご自身にも」

… riefen: "**Ehrfurcht!**" 　Wilhelm stutzte. "**Ehrfurcht!**" hieß es wiederholt. "**Allen fehlt sie, vielleicht Euch selbst.**

●第３巻18章

更に言うならば、諸芸術はまた**自分自身から多くを生み出し、他方、自然が完全となるに欠けているものを数多く付け加える**、――芸術は自分自身のうちに美をもてるがゆえに。それゆえに**フィディアス**は、何ら肉の眼に見ゆるものを模倣したのではないが、神を刻むことができた。彼は、もしツォイス［ゼウス］がわれわれの眼にふれることもあったらこうもあらわれたであろうという姿を心のうちに捉えたのである。

［・私（佐々木）には、フィディアスは、「畏敬の念」の権化（権現）のように思える。

　フィディアスの作品を見ると、「**この世に持って生れてこないもの**」「すべての人に欠けているもの」があることを、まざまざと突き付けられる。］

●ゲーテ「ラオコーンについて」から：

　真の芸術作品は、自然の作物と同じく、**私たちの理解力にとって、常に無限なるものとしてある**。それは観たり、感じたりできるし、私たちに働きかけるが、本当には認識できないし、ましてやその本質や価値を言葉で言い表すことはできない。ここでラオコーンに関して述べることも、決してこれを論じ尽くそうなどという思い上がった気持ちからではない。この卓越した芸術作品について書くというよりも、むしろこれが契機となって書かれているのである。この作品がやがて展示されて、愛好家なら誰でもこれを楽しみ、各人のやり方でこれに関して語ることができるようになればと思っている。

 Ein echtes Kunstwerk bleibt, wie ein Naturwerk, **für unsern Verstand immer unendlich**; es wird angeschaut（観る）, empfunden; es wirkt, es kann aber nicht eigentlich erkannt, viel weniger sein Wesen, sein Verdienst（価値） mit Worten ausgesprochen werden.

●『ヴィンケルマン』（芦津訳）

　ひとたび芸術作品が産み出され、その理想的な現実とともに世に姿を見せるや、それは持続的な効果をもたらし、最高の効果を発揮する。

なぜなら芸術作品とは全体の力から精神的に展開されるものであり、それゆえ**すべての卓越したもの、尊敬と愛に値するものを取り入れ**、**人間の形姿に魂を吹きこむことによって人間を人間以上に高め**、その生活および行為の円環を完結し、過去と未来とを包括する現在のために人間を神化するからである。

　私たちが古代人の叙述、報告、証言などから解明できるように、かつて**オリュンピアのユピテル**を眺めた人々は、このような感情に捉えられた。

人間を神に高めるために、神が人間になったのである。彼らは至高の尊厳を目（ま）のあたりにし、最高の美に胸を打たれた。

　この意味において私たちは、「**この作品を見ずに死ぬのは不幸である」と心からの確信をもって語った**古代人たちを是認すべきであろう。…

　友情と美の二つの要求が同時に一つの対象において満たされるとき、人間の**幸福と感謝の念**は、きわまるところを知らない。そして人間は、彼の所有物のすべてを、**帰順と崇拝（Anhänglichkeit und seiner Verehrung）のささやかな印として捧げたいという気持ちになる**であろう。

◎エッカーマン『ゲーテとの対話』から。

●（第三部1831年6月20日）

　モーツァルトがドン・ジョヴァンニを作曲した、などとどうして言えようか！　作曲する――まるで卵と小麦粉と砂糖をこねあわせてつくる一片のケーキかビスケットででもあるかのようだ！　――それは、部分も全体も**ひとつの精神から一気に注ぎだされ、ひとつの生命の息吹（Hauche）につらぬかれた精神的な創造なのであって、製作者はけっして、試みをおこなったり、継ぎはぎをしたり、恣意的（Willkür）な処置をほどこしたりはしていない。彼の天才のデモーニッシュな精神が彼を支配し、彼はこの精神の命ずることを遂行するよりほかなかったのだ**。（渡辺健訳）

●（第三部1828年3月11日）

　つまり天才というのは、神や自然の前でも恥かしくない行為、まさにそれでこそ**影響力をもち永続性のある行為を生む生産力にほかならない**のだ。モーツァルトの全作品は、そうした種類のものだ。あの中には、世代から世代へと働きつづけ、早急には衰えたり尽き果てたりすることのない生産力があるのだよ。そのほかの偉大な作曲家や芸術家についても同じことがいえるよ。**フィディアス**やラファエロは、その後何世紀にもわたって影響を及ぼしたではないか！　…　**生産的な影響を与えつづけないような天才は存在しない**からだよ。…

　あらゆる最高級の生産力、あらゆる偉大な創意、あらゆる発明、実を結び成果を上げるあらゆる偉大な思想は、だれかの思うままになるものではない。それは一切の現世の力を超越しているよ。人間はこうしたものを、天からの思いがけない賜物、純粋な神の子とみなして、ありがたく感謝の心で受け取り、尊敬しなかればならないね。それは、**人間を思うままに圧倒的な力で引きまわすデモーニッシュなもの、人間が自発的に行動していると信じながら、じつは知らず知らずのうちにそれに身をささげているデモーニッシュなもの**、に似ているのだ。こういうばあい、人間は、世界を統治あそばす神の道具、神の感化を受け入れるにふさわしい容器と見なされるべきだ。

人間というものは、ふたたび無に帰するよりほかないものさ！――並みはずれた人間なら誰でも、使命をにない、その遂行を天職としているのだ。彼はそれを遂行してしまうと、もはやその姿のままでこの地上にいる必要はないわけだよ。そして、彼は神の摂理によって、ふたたび別のことに使われる。しかし、この地上では、何事も自然の運行のとおりに起るから、悪魔（デーモン）どもがひっきりなしに彼の足を引っぱり、ついには彼を倒してしまう。

●（中）1829年12月6日。

　そこで私は、**デーモンというものは、人間をからかったり馬鹿にしたりするために、誰もが努力目標にするほど魅力に富んていてしかも誰にも到達できないほど偉大な人物を時たま作ってみせるのだ**、という風に考えざるをえないのだよ。

　こうして、**デーモンは**、思想も行為も同じように完璧なラファエロをつくりあげた。少数のすぐれた後継者たちが彼に接近はしたが、彼に追いついた者は一人もなかった。同様に、音楽における到達不可能なものとして、**モーツァルトをつくりあげた**。文学においては、シェークスピアがそれだ。

◎『プロピュレーエン』序言（新井靖一訳）『ゲーテ古代芸術論集』（早稲田大学出版部）

どんなにひどい絵でも感覚と想像力に訴えることができる。それは、そのような絵でも感覚と想像力を動かし、解放し、自由にさせてくれるからである。**最高の芸術作品**もまた感覚に訴えかけるが、それは**より高次の言葉**であって、われわれはむろんこの言葉を理解しなければならない。**そのような芸術作品は感情と想像力を束縛し、われわれの恣意を奪う**。**われわれは完全なものを、好き勝手に処理し、支配することはできない。われわれはそれに自分を委ねないわけにはゆかないのだが、そうすることによってわれわれは高められ、改善され、ふたたび自己を手に入れるのである**。

◎『ドイツ彫刻家協会』1817年（新井靖一訳）

　しかしながら、造形芸術においては**考えたりしゃべったりすることはまったく容認しがたく、また無益であり、芸術家はむしろ価値ある対象を自分の目で見ることが必要である**、この理由から彼は非常に古い時代の遺物に心を向けなければならない。そしてそういうものは何といってもペイディアスとその同時代人の作品のうちにしか見出すことができないのである。

◎ロマン・ロランの言葉

・私が高校時代に課題図書で読んだ『ベートオヴェンの生涯』の訳者解説（片山敏彦）から

ロマン・ロラン（Romain Rolland）にとってはその少年時代以来、ベートーヴェンは**最大の魂の師**であった。「**生の虚無感を通過した危機に、私の内部に無限の生の火を点してくれたのはベートーヴェンの音楽であった**」とロランは『幼き日の思い出』の中に書いている。…

**「諸君がみずから意識しないときですら諸君は古代の諸彫刻作品の石の心臓に眠っている息を吸い込んでいるではないか。フィディアスの感覚と理性と生命の火との調和を吸い込んでいるではないか。」**

（原文）**Vous ne vous en doutez pas, mais vous respirez**（息をする） **encore** （再び） **souffle**（息、風） **qui dort au cœur de cette pierre**（石）**, l'harmonie**（調和）**de ses sens**（感覚）**et de sa raison**（理性）**, le feu**（火） **de sa vie**（生）**.**

●白隠禅師の言葉：

**はにず**。… **、、にの、くにせり。かくのくのをせんとせば、… をし、をにたし、せよ**。

◎私の結論（決意、使命）　私の「畏敬の念」の実践：

背骨をすべて放ったところに立ち戻る以外に、人間として立ち起きる道はない。

「」　これを常に私自身生き、人にも勧め共に生きること。